

チェルノブイリ通信

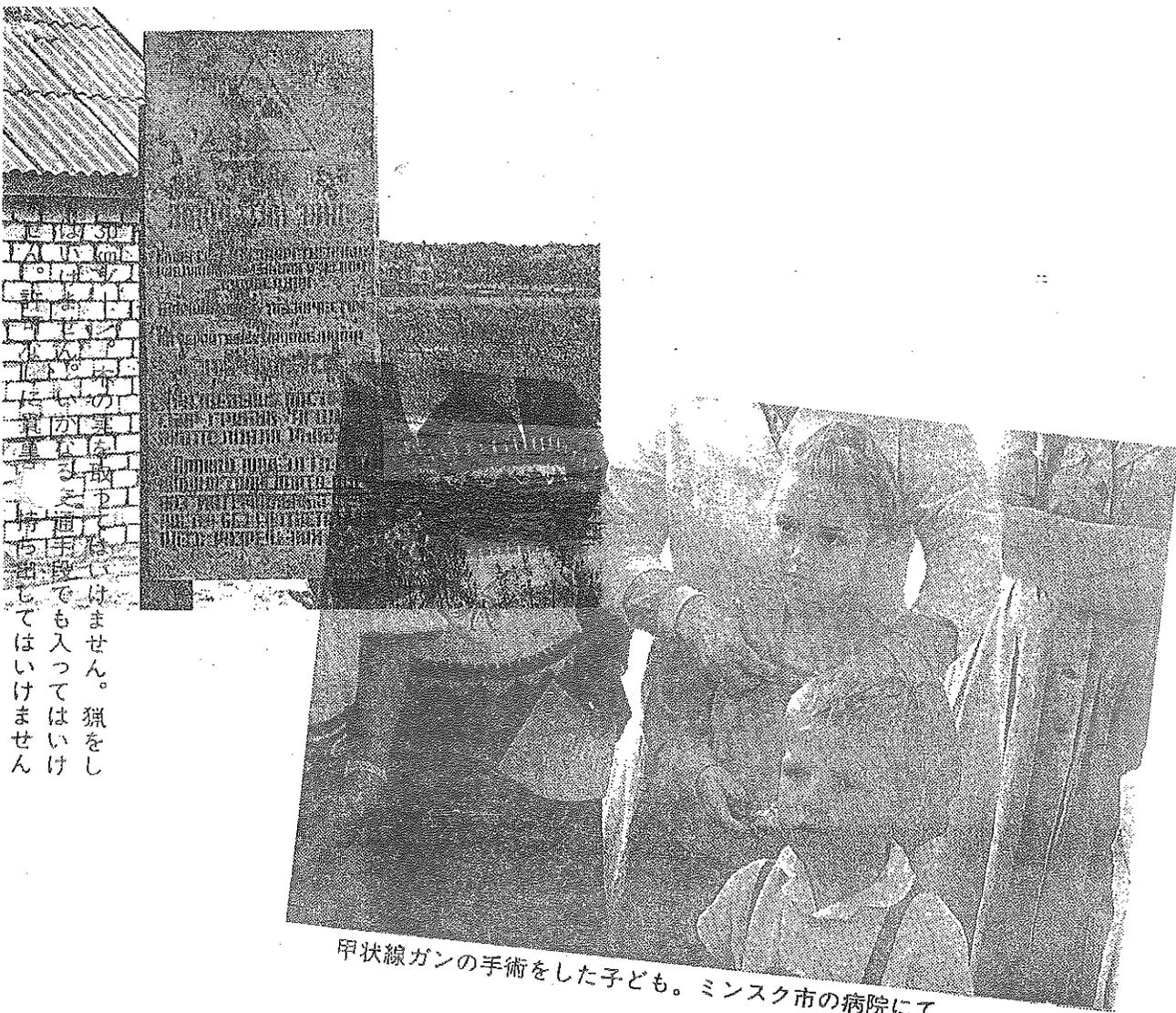
発行 チェルノブイリ支援運動・九州事務局
連絡先 北九州市八幡東区春の町1-3-7 日開荘2号
Tel-Fax 093(681)1780

口座番号 福岡7-55328
加入者名 チェルノブイリ支援運動・九州

1994年5月20日

No.

25号



チェルノブイリ
から送られて
くる手紙は
一枚一枚
大切に
読んで
います。

甲状腺ガンの手術をした子ども。ミンスク市の病院にて

Беларускі
Сацыяльна-Экалагічны
Саюз «Чарнобыль»

Рэспубліка Беларусь,
220048 Мінск, вул. Мяснікова 39
Тэлефон (0172) 20-39-04, 27-84-20
Факс (0172) 71-58-19.
Эл. пошта: root@sasha.ibibel.glas.apc.org



Belarusian
Socio-Ecological
Union «Chernobyl»

Republic of Belarus
220048 Minsk, Myasnikov Street 39
Phone (0172) 20-39-04, 27-84-20
Fax (0172) 71-58-19
E-mail: root@sasha.ibibel.glas.apc.org

Mr. Mamoru Fukae

President of Assistance Movement to Chernobyl
Phone/fax: (093)681-1780, 452-0665
Kitakyusyu
Japan

Dear Friend!

Belarusian Socio-Ecological Union "Chernobyl" invites your delegation to Minsk from 8 to 16 June 1994 for further development of charitable and cultural contacts.

We invites the following persons:

1. Mamoru Fukae data of birth 12.02.1952, male, head of delegation;
2. Tsuyoshi Nagira, 1.10.1941, male, doctor;
3. Minako Yehara, 10.02.1958, female, nurse;
4. Hatsumi Akizuki, 11.04.1959, female.

We shall provide your delegation with meals, accommodation, insurance and transportation.

Welcome!

Minsk,
30 April 1994



Vasil YAKOVENKO,
President of Belarusian
Socio-Ecological Union
"Chernobyl"

PS. Наши врачи, которых Вы пригласили в Японию, хотели бы познакомиться с работой эндокринологических служб, новейшей медицинской техникой, новыми методами в лечении радиационной эндокринной патологии. Они намерены, кроме того, обменяться опытом своей работы с коллегами, выступить с лекциями о медицинских аспектах глобальной чернобыльской катастрофы, послужить делу укрепления профессиональных и дружеских связей с японской стороной.

*Ручкаэ-зан! Нас интересует: в составе Вашей делегации есть ли переводчик?
Бай! В.Я.*

「チェルノブイリ通信」No.25号を お届けします。

第四次調査団派遣まであと二週間あまりとなり、出発の準備におわれる日々が続いています。通信24号以後の動きとしては、ボランティア貯金の寄付金配分の申請、調査団メンバーの確定、ベラルーシからの医療研修受け入れの準備などが主なものです。

今回の調査団のメンバーは、大分協和病院院長の柳楽先生とグリーンコープ生協おおいたの秋月さん、そして深江の3人です。通訳がモスクワから同行しますので、ミンスクには4人で行くこととなります。

第四次調査団 日程

- 6月8日(水) 福岡→成田→モスクワ
(宿泊 モスクワ)
- 9日(木) 在ロベラルーシ大使館にてビザ申請、夜汽車にてミンスクへ
- 10日(金) ミンスク市
- 11日(土) ミンスク市
- 12日(日) ミンスク市
- 13日(月) ミンスク市→モズィリ市へ移動
- 14日(火) モズィリ市→ミンスク市へ移動
- 15日(水) ミンスク市→モスクワ市(夜汽車)

16日(木) モスクワ→成田へ

17日(金) 成田→羽田→(福岡、大分)

6月8日(水)、12時55分成田発SU578便にてモスクワに向います。モスクワ着は現地時間18時30分の予定です。(時差は6時間)翌日、在ロベラルーシ大使館でビザ申請を行い、夜行列車に乗ってミンスクへと向います。モスクワとミンスクの時差が1時間あり、約12時間ほどの汽車の旅となります。

【ミンスクでの活動】

- ① サナトリウムの取材、子供たちの様子、保養施設としての現状などを調査し、今後の展開を探る。
- ② 病院…ミンスク放射線医学研究所付属病院、ミンスク小児血液病センターなどを訪問。
- ③ コルホーズ(ジュース工場の件について)
- ④ 保健大臣、もしくは関係者との会見
- ⑤ 15日から始まる子供民謡フェスティバルの取材。

【モズィリでの活動】

- ① 子供病院の取材とエコーの贈呈
- ② パレスカヤ・ソーラチカの子供たちとの再会。

以上のような調査活動を行なう予定にしています。また、ベラルーシ・テレビがサナトリウム・九州に関する番組の準備を始めています。テレビ局と文化省との取り決めでは、サナトリウム・九州の募金集めのためのテレビ・ラジオマラソンを行なうことになったそうです。実施は来年になりそうですが、私たちと共同で行ないましょうとの提案もあり、この件についても具体的な話を進めたいと思います。

15日からスタートする子供民謡フェスティバルを取材し、再び夜行列車に乗りこみ、モスクワへと向います。

16日、19時20分発SU575便にてモスクワから成田へ。成田には17日午前9時40分に到着予定です。

支援物資

- ① 超音波診断装置SSD500一式
(モズィリ市子供病院へ贈呈)
- ② SSD500オプションのエコーコピー、一般検査用探触子UST-934N-3・5MHZ
(サナトリウムに贈呈)
- ③ 自動血球計測装置、血液分析機の試薬、総合ビタミン剤など
(サナトリウムへ贈呈)

- ④ サナトリウムの運営資金、5万ドル

以上です。

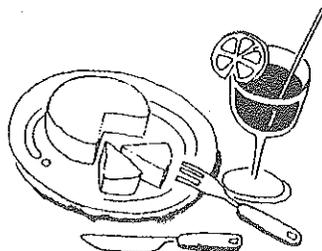
医療研修の実施

今回の調査団には、大分協和病院院長の柳楽先生に同行をお願いしています。専門家の目を通して、今後の九州の支援の在り方について助言をいただくためです。

そして、帰国時にベラルーシから二人の医師を九州に連れてくることになりました。一人は、イリーナ・コシェバヤ (IRINA KOSHEVAYA) さん。免疫学が専門で、共和国放射能医学保健医です。「サナトリウム・九州」の顧問医師をしています。もう一人は、ガリーナ・チェルヌイシェバ (GALINA CHERNYSHEVA) さん。モズィリ市第二子供病院小児科医です。

6月17日に来日して、7月18日に帰国という日程で、約一ヵ月ほど九州の病院で医療研修を行なうことにしています。

研修先は、甲状腺ガンの治療では有名な野口病院 (大分県別府市) と大分協和病院を予定していますが、研修内容についてベラルーシ側との調整がもう少し必要であり、確定ではありません。



今年もグリーンコープ生協の組合員さんからたくさんの支援をいただきました。

昨年に引き続き、今年もグリーンコープの組合員さんに対し、チェルノブイリ支援の呼び掛けをしていただきました。

今年もたくさんの組合員さんから申し込みをいただきました。心よりお礼申し上げます。

内訳は、1口4万2000円でサナトリウム九州を維持していくためのサナトリウム運営基金に102人、1口2000円のチェルノブイリ医療援助基金に1296人となっています。金額にして687万6000円となります。ありがとうございました。

(※ 昨年に引き続き申込みいただいた方には資料を送っていません。今回振替用紙を同封していますので、ご了承下さい。)

チェルノブイリ支援のための無農薬コーヒーの売り上げも順調にのびており、おかげさまで、今年度も2000万円を越える募金が寄せられることになりました。2年目を迎えるサナトリウムの運営が気がかりでしたが、今年も200人を超える人たちに支えられ、予定どおりの支援を続けることができます。みなさまのご協力に心より感謝しております。

調査団の横顔

【柳楽 翼さん】

「柳楽」とかいて「なぎら」と読み、「翼」と書いて「つよし」と読みます。いちどで読める人はまずいませんが、そのかわり、いちど記憶するとなかなか忘れない名前でしょう。

ふるさとは島根県で、いにしえは大陸にゆかりのある姓なのかなと本人は言っています。

1941年に島根県に生まれ、1966年に岡山大学医学部を卒業、初任地は倉敷市でした。1960年代後半は大気汚染をはじめとした「公害」が顕著になり、瀬戸内海沿岸部も環境汚染がすすみます。また、無理を重ねた日本の高度成長は、そのしわよせを労働者の健康にまで及ぼすようになります。労働災害・職業病の多発です。

1973年、岡山大学医学部衛生学教室にもどった柳楽医師は、教室の皆さんと積極的に「公害」「労災・職業病」とかかわっていきます。現場にでかけ集団検診を実施し、その結果を分析し提言するというなかから、集団としての健康被害の実態を次々と明らかにしてきました。このようなとりくみは、臨床医学だけではなく、疫学としての仕事が必要でした。

柳楽医師の、大気汚染などからくる喘息や呼吸器疾患への研究、腰痛、頸腕症、じん肺症や振動病など労災・職業病へのとりくみ、休廃止鉱山による

ひ素中毒公害病へのとりくもなどは、全国的にも高い評価をうけています。

1976年大分の住民運動と出会い、新産業都市計画にたいする8号地埋立反対闘争のなかで医学的な影響について取り組むことになります。また、職業病の治療と予防活動などの取組み通じて大分県労評と出会い、県労評の強い要請をうけて、働くものの医療機関づくりに参加することになります。

この取組みは大分県勤労者医療生活協同組合を産むにいたり、柳楽医師は現在医療生協・大分協和病院の院長をつとめるとともに、医療生協の副理事長をつとめ多忙な日々を送っています。

【秋月 初美さん】

これまで脱原発は、おおいたの組織委員会内（グリーンコープ生協おおいた）では、メンバー不足からなかなか取り組めずにおりました。1994年度は、多くの取り組みに担当を設ける事で、より広がりをとかけ、秋月さんはその中で主に脱原発を担当しているメンバーの一人です。以前は、地区での組合員活動を共に頑張ってきた仲間で、個人的にも長いおつきあい、全てにおいて的確で、さわやかな女性です。今回のような視察団に同行する体力が出来た事は、他の組合員さんにとっても元気のでる事。又実際に一組合員の立場で参加する事は、活動を身近に感ずる良いきっかけとなる事でしょう。とにかく無理せずありのままをと思っております。気を付けて行ってらっしゃい。
(家室 まり)

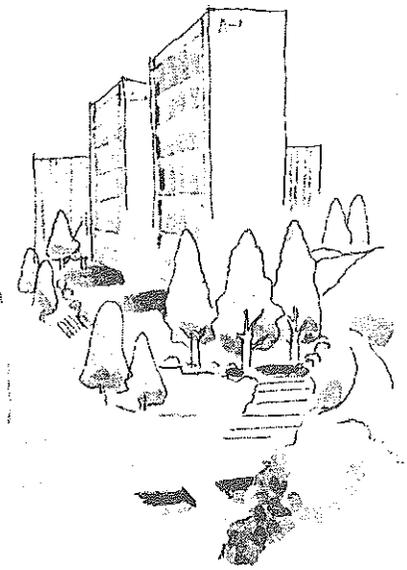
◆ ◆
国際協力隊とか海外ボランティア等の活動を最近よく耳にする。ところが何の技術も持たぬ私のような一般人には縁遠い世界なのである。参加したい気持ちがあるのに……。そう、居ながらして、私でもできる事はないかしら？何か方法はないかしら？

それを探すチャンスが降って来た。私と同じ主婦、子を持つ母親の同行が決まったのだ。

彼女の『女性』の感覚、子を持つ母のまなざしで見て、感じたものが、私の糧にならぬはずがない。伝わって来るものの中から、何の力も技術も持たぬ者にもできる事を見つけられたらいいな。たったひとつでも。

台所できゅうりを刻みながら、お茶碗洗いながら、エネルギー（気持ち）を留めて、帰りを待っています。

(川合 宏枝)



夜盲症シンドローム（抄訳）

最近、青少年健康回復センター・キエウシュウに13歳の少年、コースチャ・ゴリンスキーが入所してきた。1986年3月、ゴメリ市に住むゴリンスキー母子が放射能病と診断された。このあと彼らは特別にモスクワのクレムリン病院におくられた。これはめったに誰にでもされることではない。しかし、1988年には病状が再発した。コースチャが気絶するようになった。そして、彼ら二人に実験が始められた。

国の放射能病管理局の文書庫からコースチャのカルテがなくなってしまった。それには放射能病の証明書が添付されていた。今、誰もこの病気を認めていない。医療関係者の頭には、ベラルーシには放射能病はなかったし、これからもないという考えがひらめき始めた。このことについて私は個人的に前の腫瘍学研究所の所長で今の保険省放射線主任医師ジェーフ氏から聞いたことがある。

ゴリンスキー母子はポロポロになってモズィリ、ミンスクと移送された。

クラスノアルメイスカヤにある放射線医学保健所に1992年6月12日にアスタホバ博士が来訪しゴリンスキー母子を診察した。母親の話によると診察は4時間をこえた。そのあと、アスタホバ氏はコースチャの病気について、口頭で診断の結果を伝えた。コースチャがクリミヤやアルチェクに行っ

たさいの飛行機での被ばくが原因であると。

そして、コースチャはミンスク第一病院血液学センターに送られた。そこでは専門家のアレニコバ、スイツケピッチ、ドイツのゲライン教授が診察に当たった。かれらは、コースチャには「慢性放射能病の治療のための入院」措置と判断した。それは1993年6月5日のことであった。このことは、ある人々にとっては衝撃であった。

放射線医学研究所（アスタホバの影響の強いところ）、保険省は当惑そのものであった。彼らはアレニコバをけなした。コースチャの病気とチェルノブイリ関連で病気になった数百、数千の人々が毎日のように現われている。たとえばカリンカピッチのイワン・ミシヨテも放射能除洗作業に従事して発病したのだが、これも認められていない。不思議なことがある。1986年5月からはじまったソ連共産党政治局チェルノブイリグループの秘密議事録には、数百、数千の放射線病の診断が報告されている。このことについては、すでにナバトに記事を掲載した。その5月12日のは「この数日、入院したものの2703人。基本的にはベラルーシである。退院したものの678人。検査中のもの10196人。うち放射線病の兆候のあるもの345人」と記している。次の日には「検査および治療

中のも9733人、うち子ども4200人。放射線病と診断されたもの299人、うち子ども37人」と報告している。次に新しい数字が続く。5月20日の記録では「放射線病と診断されたもの211人、うち子ども7人」となっている。このうち死んでしまった人々もいる。

現在、このような犠牲者はいないのだろうか。コースチャみたいな例はないのだろうか。今、医療機関に奇妙なことが起こっている。ホイニキの地区病院の最上階にある文書庫から深夜チェルノブイリ関係の文書が全部なくなってしまった。しかも誰もそれを追跡しようとするものもなかったのである。この事件のあと、現場で指揮をとったのが先に登場したジャコフ氏であった。そのあと文書はもとに戻されたと報告された。私は深夜の窃盗事件の続報を入手した。それによると文書はカルテ千枚以上で第一次資料となる貴重なもので、いまだにその行方は知れないと。

驚くべきことがまだある。モスクワの生物物理学研究所の専門家の話によると、血液分析の資料がなくなってしまった。それは1986年にモギリョフ州子供病院で採取したものの分析資料であった。それを持ち去ったのは青年で公安機関か、州のチェルノブイリ委員会のものであろう。現在の保健大臣カザゴフは当時、モギリョフ州の保健関係の責任者であった。

医療カルテの消失は、チェルノブイリ汚染地区の病院では当たり前のことであった。これは役人の犯罪にちがいない。また医療関係者の職務怠慢も原

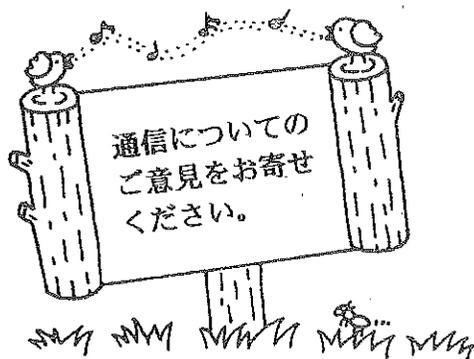
因である。

今年1月半ば、サナトリウムの医者リュエバック氏が国の放射線医学管理局にコースチャ・ゴリンスキーを再検査のために連れて行った。そこで驚くべきことがあった。再度、カルテを請求して、見たところ、カルテがあったのである。さらにそこにはアスタホバの診断とまったく同じことが記入してあった。

今、誰がなぜチェルノブイリの被害者の真の資料をかくそうとしているのか。わたしたちはこの回答を引き出さなければならない。

一つはモスクワ第6病院。そこには放射能病が500例登録されている。それを指導しているのが、有名な医者アンゲリーナ・グシコバである。資料の集結先として、もうひとつ忘れてはならないのが国家公安機関である。

ワシーリ・ヤコベンコ



ラムサル危機にあるプリヤンスク

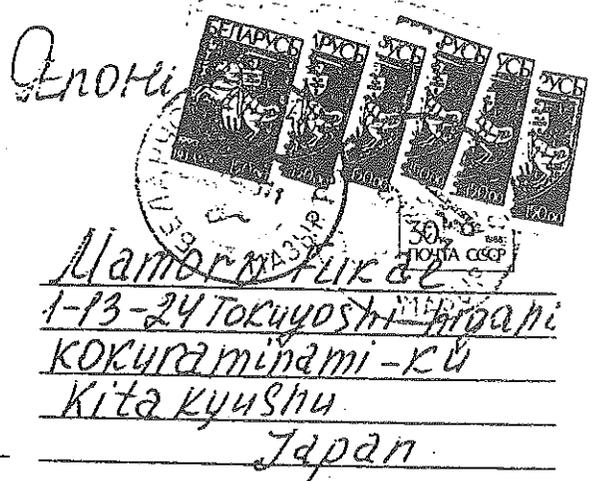
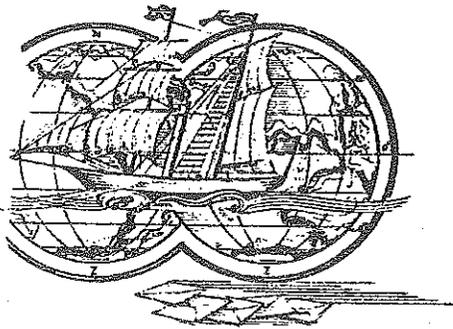
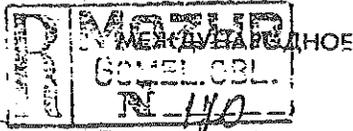
ナバト18号 1993年7月

幾度となくナバト誌は、プリヤンスク地域でのチェルノブイリ大惨事の結果について述べている。同大惨事の結果、一般の人々ばかりでなく、多くの科学者も又、痛ましい経験をしたのである。彼ら科学者は、その地域での状況を誠実に、かつ客観的に調査を行なった。ロシアでは、チェルノブイリ事故について、事態に関してモスクワやレニングラードの放射線学者の意見が影響力を持っており、これらの科学者は学士員会員のイリーン氏やラムサル博士の様にウクライナやベラルーシではその名は全く知られていない人々である。イリーン氏は、化学者であるラキンスキー氏主張を思いがけなく、部分的に指示しており、「危険は無い、でっちあげに過ぎない」という見出しで、論文を載せた。以下は、以前同誌に掲載されたアダモヴィク氏の論文に対するラキンスキー氏のコメントである。その中で同氏は、「チェルノブイリ原発の原子炉により影響を受けた地域からの人々の移動と避難に終止符を打つべきである。」と、訴えている。彼の言葉をここで引用すると、「汚染地区の99%で記録された放射能汚染と放射能のレベルは、人々の健康に於いても、又次世代の人々にも危険は無い。それらは、自然放射線変動の制限

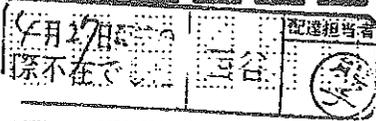
内であり、放射線の生理学上の影響では、その影響は好ましく刺激となり得る一方、放射線の量が多ければ、その影響は致命的である。」ここで、一つの疑問が湧いてくる。つまり何故、原子力情報中央研究所の広報機関がアダモヴィク氏の論文をトウモロコシの生産量と国内の食用飼鳥類の増加の為に、イオン放射線の応用を研究している機関である“ティミイリャゼフ農業アカデミー”へ校閲に出したのだろうか。何故、放射線衛生問題を調査している研究所へ校閲に出さなかったのだろうか。私は、これは偶然であるとは思わない。汚染地域でのチェルノブイリ大惨事の重大性をもみ消そうとする手段が、年々不本意にもまかり通っているのだ。この問題を一掃し、その為の手段を各々の局や地域の目的の為に利用する事に関心を持つ多くの人がある。しかし、「数十万もの人々を運命に任せっぱなしにして、最も権力を有する者を優先せよ。」と、公に発言するのは危険だ。この目的の為に、これまで長年に渡り、“ガンマの分野”で実績を築いたにもかかわらず、今は一部はチェルノブイリ大惨事故に、又一部は危機故にその実績が必要とされなくなった為、途方に暮れている科学者達を利用する方が、ずっと安全策なのである。そして、もし人々がその事実を知り、憤怒すれば科学者の陰に隠れば良いのである。このストーリーのモラルとは、一体何なのだろうか。誰も、汚染地域での科学的調査を実施することを禁じはしない。ましてや、農地の拡大の為には、なおのことである。

その様な研究の結果こそその地域での経済にとって有益なのかも知れない。訴えたいのは、農業生産とその様な人々を同列に考えてはならないという事である。更には、この様な刺激策は必

ずしも常に延命には結びつきはしないのだ、という事である。アレキサンダーメネッツ氏が言うように、今ここの地域を立ち直らせる時なのだ。



RECOMMANDE



с индекс предприятия связи места назначения

↑
4月27日に届いたモズリからの手紙。
何と4ヶ月かかっています!

こんにちは！深江さん
わたしはアーラです。わたしや家族のみんなは皆さんのわたしたちに対するところづかいに感謝しています。
わたしは、皆さんの美しい国、太陽、果物をいつも思い出しています。
家族みんなであなたの誕生日をお祝いします。学校では冬休みが始まります。冬休みにはわたしたちの町でコンサートをひらきます。いま、新しいダ

Индекс предприятия связи и адрес отправителя
244760 БЕЛАРУСЬ
г. МОЗЫРЬ
ул. ИНТЕРНАЦИОНАЛЬНАЯ
ПОМ N 182 кб n 50
Гобилко Алла

ンスの練習をし、衣装を準備しています。
練習であつまったときには、いつも日本での旅行について話しています。
わたしたちはみなさんのすばらしい国にもういちど行きたいと夢見ています。
ありがとうございました。
さようなら。

アーラ

たくさんのメッセージ、 ありがとうございました!



グリーンコープ生協に会員の皆さんから、サナトリウム運営基金、医療援助基金の申し込みと一緒に、たくさんのメッセージが寄せられました。ごく一部ですが、紹介をします。皆さん方の思いは、サナトリウム子どもたちや職員、現地の方々にぜひ伝えていかなくてはと思っています。また、毎日、事務作業や整理におわれている事務局スタッフにとっても大きな励みです。

- ・日本でも原発の建設、運転が次々と実行されつつある中、昨年初めての子どもを出産しました。育児をしていきながら、この子どもたちの未来に悪い影響しか与えないものを、これから先私たち大人がどう排除していくべきかその重大さをことさら強く感じるようになりました。今、苦しんでいる罪のない子どもたちのために、微力ではありますが援助し、心を寄せて真剣に考えていかなくてはと思っています。(福岡市東区 H.K.)
- ・子ども達が一番にこのような事故の害を受けることをとても悲しく思います。少しでも苦しみが少なくなるようお祈りします。(鹿本郡 T.Y.)
- ・遠方にいて何もできませんが、我が家の8歳と10歳の女の子と一緒に応援しています。(北九州市戸畑区 T.N.)
- ・子を持つ母親として、いつ自分達の身に起きるか分からない恐ろしさを感じています。特集での放送には、思わずチャンネルを廻し、「なぜ、こんなめにあわなければならないの?」と訴えるような子ども達の表情に合うと、胸がつまりそうです。チェルノブイリに本当の春が訪れ、子どもの唄声が街を包むことを祈っています。神の祝福があらんことを。(久留米市 U.T.)
- ・汚染された土地から逃げるのができず、そこで成長してゆかねばならないなんて…。もし我が子だったらと思うと胸がいたみます。国の体制も変わり経済的にも大変な状況なんでしょうね。長くこの活動を支援し続けたいと思います。ぜひがんばって下さい。(福岡市城南区 T.A.)

これからも、みなさんのご意見や、投稿など載せていきたいと思っています。また色々なアイデアも募集しています。

チェルノブイリ原発
事故から八年。後遺
症に苦しむ被災者を
支援するため、市
民グループが六月、
ベラルーシに医療調
査団を派遣する。

調査団のメンバーは、脱のは今回が二回目。

原発グループ「チェルノブイリ支援運動・九州」(事務局・八幡東区、会員約二千人八百人)の代表で小倉南区在住の深江守さん(左)、大分協和病院(大分市)の

今後の運動に医師の視点を

柳榮(なぎら・つよし) 改良してサナトリウム「キ

院している。

スクや近郊のモズイリで被

害の実態と医療設備の整備

状況を調べ、十七日に帰国

院長(左)ら三人。同グループからベラルーシ(旧ソ連・白ロシア)へは、一九九一年以来毎年調査団が訪れているが、医師が参加する

チェルノブイリ原発事故は、当時風下だったベラルーシに被害が集中し、子どもたちに甲状腺がんが急増しているという。

深江さんは「今後の支援運動のあり方を探るため、柳榮先生に、専門家の視点で現地を見てもらいたい」と話している。

柳榮先生は「今後の支援運動のあり方を探るため、柳榮先生に、専門家の視点で現地を見てもらいたい」と話している。

さらに二回、現地を訪れ、血液分析機などの医療機器を贈った。現在、症状の重い子どもたち約二百人が入

は六月八日に出発し、ミン

スクや近郊のモズイリで被

害の実態と医療設備の整備



前回の訪問で調査団が出会った子どもたち。首に、甲状腺がんの切開手術の跡がある＝93年7月、ミンスクの放射線医学研究所付属病院で(深江守さん提供)